

## 經濟史

——その方法と課題の二、三の問題について——

增淵龍夫

經濟史と云う學問が、一體經濟學の一部門なのか、或は歴史學の一部門なのか、と云う質問をよく學生の諸君から受ける。この質問が單に學問上の分類に關する形式的疑問ならば大した問題ではないが、その様な質問を提示するその底には十分整理されていないまでも、諸君自身の問題要求と、諸君が讀み或は教わるところの經濟史の書物や講義との間に、何か滿されないギャップを感じているのではないかと思う。もしそうだとすると、この質問はまさに正しく問題をついているのであって、それは經濟史の方法に對する最も基本的な問題にも觸れて來ることになる。私達が、經濟史の研究を通じて明らかに

したいと思つてゐることは何なのか、と云う私達自身の問題要求を整理するためにも、從來私達に與えられていた經濟史と云う學問のもつ性格とその問題性について、あらためてふりかえつて見る必要がある。

經濟史と云う學問は、たしかに、經濟學の一部門としての性格と歴史學の一部門としての性格を併せもつてゐる。又そこに經濟史を研究する者にとって最後までついてもまわる基本的な困難な問題が伏在していると云つてよい。それならば、經濟史がその基本的方法としてその様な二面的性格をもつと云うことは、どう云うことを私達に意味してゐるのであるうか、又そのもつ二面的性格は私達のもつ問題要求とどの様にかかわつて來るのだろうか。

經濟生活の歴史發展の中に普遍的な法則を見出し、私達の現在の經濟生活をその歴史發展の段階の中に位置付けて理論的に把握したいと云う實踐的な問題要求は、たしかに、經濟學の中から提示されたものであった。それは經濟學の對象をその歴史性において自覺したと云う意味で、古典派經濟學に對して新しい問題領域を開拓したものであるが、そこで自覺された對象の歴史性はあくまで經濟學の體系として、理論的、法則的に把握しようとしたのである。この様な要求から發する經濟史研究に方法的規準を與えているものとして、大づかみに云って、私達は、ドイツ歴史學派經濟學の發展段階説とマルキシズム經濟學の經濟史理論の二つをもっている。兩者はそれぞれ異つた方法的立場から經濟の發展を普遍的法則として理論的に把握しようとしているものであるが、今日私達に與えている影響は後者の方がはるかに大きい。

歴史學派の經濟發展段階説は、國民經濟をその主體とするものであるが、それはあらゆる國民における經濟發展の律動の同一性を豫想するものであって、現在の經濟

の理論的分析より得られた生産とか交換とか消費とか云う要素的諸概念を整理の規準としながら、過去の歴史時代の經濟の個々の事實の底に共通の經濟的意味を考え、それにかけて各時代の經濟段階又は經濟體制を、現在のそれとの比較において類型化し、それぞれの類型化された段階の間に經濟發展の基本法則を見出そうとするものであった。それはもともと、現在の國民經濟の歴史的地位を理論的體系的に把握しようとする實踐的關心より生れ、又その様な問題要求の底には、もともと歴史の展開を意味實現の過程、價値の自己展開の過程として觀する思想的契機とむすびついていたものではあるが、歴史派經濟學の經濟史把握は、専ら經濟發展の個々の段階における經濟生活の類型的把握に關心の重點がおかれ、一つの段階から次の段階にうつる發展の必然性については論理的方法的基礎付けに缺けるうらみがあった。したがって、歴史學の側における個別的實證研究の進展により集積されて來る豊富な歴史素材の抵抗に當面して來るにしがたい、その段階概念は、認識手段としての類型概念に退化して、もともと實踐的な要求は、次第に觀照的要求

に轉化して行き、そこに意圖された經濟史の體系は、歴史の繼起的發展それ自體と相覆うものではないことが自覺されて行つて、歴史を理論化する當初のころのみは、歴史と理論とが分離する方向にすすんで行くことになるのである。舊歴史學派からビュヘアー、更にはゾムバルトの名著「近代資本主義」に至る道は、そのことを物語っている。この段階概念から類型概念への退化を更につきつめて行けば、ウェーバーの理想型概念に行きつくのであるが、そこでは、歴史發展の法則的把握は全く斷念され、歴史理解は、われわれにとって意味ある歴史個體のその個性的側面においてのみ可能であることが、方法として論理的に自覺され、歴史の個性化的把握を意圖する歴史主義的要求に有力な概念的武器を與えることになることは、後述の通りである。

(註) 經濟發展段階説の提示している問題の意味については、村松恒一郎「經濟發展段階説」一橋大學創立八十周年記念論集上巻一九五五参照。

これに對してマルキシズムの經濟發展段階説は、各段階の類型的把握に主たる問題があるよりはむしろ、一つ

の段階から次の段階へ移行する必然的な歴史發展の自己運動の法則的方法的把握の上に提示されたものであった。それは、事物に内在する矛盾から事物の運動と發展がひきおこされると見る唯物辯證法的立場から、近代資本主義社會の分柝を通じて得られたものであるが、經濟社會それ自體に内在する生産力と生産關係との基本的矛盾關係をすどく剔出することによって、そこから必然的に生起するその矛盾の克服、ついで新しい生産關係の形成と云う動的メカニズムとしての辯證法的發展の法則を定立したのである。そしてこうした矛盾關係の現象形態に敵對としての階級闘争があるのである。したがって、ここでは經濟生活の歴史的發展をその根本において規定するものは、社會の物質的生產力であり、この生産力の一定的發展段階に對應した生産關係としてその發展段階における經濟構造が考えられ、そうした經濟構造を現實の土臺として、その上に法律や政治形態や更には社會的な意識形態が上部構造として想定されて、この生産力の發展に對應して生産諸關係に變改が生ずると、巨大な上部構造の全體も徐々に又は急激に變改され、次の

發展段階に發展して行くと言われるのであった。そしてこの様な生産力の發展によって規定される社會の發展としての人類の歴史の経過する諸段階を、マルクスは、アジア的、古代的、封建的、および近代市民的生産様式の諸時期にわけ、それは後に、原始共產制、奴隸所有制、封建制、資本主義制、社會主義制の諸段階よりなる史的唯物論の發展段階説として定式化されたのである。その歴史發展の必然性を基礎付ける方法的論理は系譜的には、ヘーゲルの辯證法の哲學から由來しているのではあるが、ここでは、世界の全秩序とその發展の全段階を本源的な精神の自己認識の過程として概念的に把握したヘーゲルの精神や理念の神秘的な非合理性は全面的に否定され、感覺的な實在の物質的世界に問題のすべてがうつされることによつて、ヘーゲルを乗り越えて更に前進する廣い問題領域がひらかれることになるのである。精神の自己完成の目標としての價值視點の代りに、生産と云う人間の自然的欲望をみたす實踐が、歴史發展の本源的な動力としておかれることによつて、その論理は、ドイツ理想主義の特殊個有の限定を越えて、廣い適應の地盤

を現實の歴史の世界に獲得することになる。それはあくまで歴史を變革と動的發展の相において把える實踐的認識の態度であつた。マルキシズムの歴史理論の生命は、その個々の發展段階の定式化された類型とその序列にあるのではなくて、その底にあってそれをささえる歴史發展の必然的な運動法則の唯物辯證法的把握にあることに、私達は注意しておかねばならない。後述する様に、それが、その基本的立場を堅持しながら、而もその定式化を自己批判しつゝ、歴史の個別的實證研究をその中にとり入れて行こうとする、マルキシズム經濟史學の最近の傾向は、その理論のその様な基本的性格から當然結果されて來るのである。

(註) マルキシズムの經濟史理論の基本については「資本論」の外には、K. Marx: "Die Formen, die der kapitalistischen Produktion verhergehen," in "Grundriss der Kritik der politischen Ökonomie, 1857~58, hrsg. 1939, Moskau". 飯田貞一譯「資本主義生産に先行する諸形態」(昭和二十四年、岩波書店) / F. Engels: "Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staats, 4 Aufl. 1891. 西雅雄譯「家族・私有財産及び國家の起

源」(昭和二十一年岩波文庫) Marx-Engels: Die deutsche Ideologie 1845~46 hrsg. v. Adratsky. 古在由重譯「マイト・イデオロギー」(昭和三十一年岩波文庫)。唯物論研究會譯「マイト・イデオロギー」昭和十二年。K. Marx. Zur Kritik der politischen Ökonomie I. Heft, Berlin 1859. 宮川實譯「經濟學批判」(殊にその序言「Vorwort」)と序説(Enleitung. Marx)等更にはレーニンの「資本主義の最後の段階としての帝國主義」(長谷部譯、岩波文庫)、「唯物論と經驗批判論」(佐野文雄譯、岩波文庫三冊)等が主たる基本的文獻となる。尙マルクスの「資本主義生産に先行する諸形態」の理解のためには、大塚久雄「共同體の理論」(昭和三〇年岩波書店)はよい手引きを與えてくれる。

尙マルキシズムにもとずく、最近の新しい經濟史研究の一例としてここでは M. Dobb, Studies in the Development of Capitalism, London 1946. 京大近代史研究會譯「資本主義發展の研究」二冊(昭和二九年、岩波書店)を舉げておく。それに關連して、高橋幸八郎「封建制から資本主義への移行」經濟研究二ノ二、昭和二六年、參照、尙、ソ聯、中國、日本におけるマルキシズム經濟史學の新しい傾向については後述。

さて、この様にして、經濟史研究は、マルキシズムにおいては、人間生活の一領域としての經濟生活の發展過

程を明らかにするだけでなく、歴史の全生活關聯の發展を規定する基本的法則を明らかにするものとして、資本主義社會の歴史的地位とその變革の必然性を解明するきわめて實踐的な課題を與えられて來ることになる。そして又、經濟學の一部門として、經濟生活の普遍的な歴史發展の運動を法則的に把握しようとする經濟史研究の經濟學的性格は、マルキシズム經濟學の體系において最も強く賦與されることとなつたのであるが、この様な歴史の法則化は、歴史學の陣營からの全面的反撃に當面しなければならなかつた。

## 二

歴史のうち普遍的な發展法則を發見し、そしてそれにもとづいて歴史を理解しようとする經濟發展段階説(マルキシズム經濟史理論をふくめて)の問題要求とその方法に對する最も強烈な反撃は、先ず歴史學の陣營からなされた。經濟史の法則的把握に對する歴史學の反撃は、單に個別的實證的歴史研究による豊富な歴史素材の提示によつて、實證的にその様な發展段階や發展法則は

なり立ち得ないことを反證しようとする、單にネガティブな反證の列擧にのみ示されたのではない。その様なネガティブな反擊の底には、歴史的生に對する認識の態度と方法についての基本的對立が、そこにはあったのである。彼等にとつて問題となるのは、歴史的生のわかち得ぬ單位としての個體のもつその個性的な意味であった。そこでは、歴史事實のもつ共通の側面を普遍的概念によつて整理し、そこに必然的な歴史發展の普遍法則を見出そうとするその様な歴史認識の態度と方法とはとらえることの出来ない歴史、個體のもつ個有な性格と意味、その様な歴史事象の個性的な側面が、われわれの生活にとつて本質的に意味あるものとして感得されていたのである。われわれの生活内容は、生活の主體である不可分の「自己」に結びつけられて意味的に統一ある主體的な全體關聯を形づくるものであると云うことを體験的に感得している者にとつては、その様な自己體験をうつして他人の生活内容、ひいては文化的社會的事象をも同様な意味的統一體として、内面的に追體験し得るものと考えられ、その様な追體験による内面的理解によつては

じめて歴史的生のもつ個性的な意味關聯が理解出来るものとして主張された。文化的社會的事象は、その個有な主體の體験と行動から直接にみちびき出されるものとして、それぞれ個性的な、特殊な意味と一面限りの他とは代位出來ぬ個有な意味とを擔うものとして、理解されなければならぬと主張されたのである。その様な思想的體験の中から、マイネッケの所謂歴史主義が生れ、その様な歴史主義的精神の地盤の上に、ヨーロッパの殊にドイツの近代歴史學は大きな生長をとげて行つたのである。そこでは、嚴密な史料批判にもとづいて、個別的な歴史事象がその主體との關連で専ら追求されて行き、歴史的生はそれぞれに個性的な多様性を展開して行くことになる。そして、この歴史的のそれぞれに個性的な多様性に即して、自由不羈なるそれぞれの主體の自己主張が、それぞれの理念的且實踐的意欲にかけてまもりつづけられて行く。したがつて、發展段階説やマルキシズム經濟史にみられる様な、歴史の發展を法則として把えようとする普遍的な理論的認識の方法に對して、十九世紀の九十年以來、歴史學の陣營からなされた反擊の動機の中に

は、その様な發展段階の序列や發展法則の非實證性を素材的に反證すると云う、素朴な意味での素材的客觀世界への信賴だけではなく、又法則科學的認識方法に對する方法的批判の要素だけではなく、そうした認識要求と深くからみ合っている社會觀に對する社會的、實踐的反應の契機が、それぞれの生活信條と不可分の關係において含まれていることを、私達は見のがしてはいけない。殊にマルキシズムに對する歴史學の批判の場合にはそうであつた。

(註一) ドイツ歴史主義については、F. Meinecke: Die Entstehung der Historismus, 2 Bde, 1936。菊盛英夫譯「歴史主義の成立」二冊、昭和一九二〇年、F. Meinecke: Staat und Persönlichkeit, 1933 中山治一譯「國家と個性」F. Meinecke, Von geschichtlichen Sinn und von Sinn der Geschichte, 1936 中山治一譯「歴史主義の立場」昭和一七、等がすぐれた理解を示している。尙、マイネッケについては上原專祿「マイネッケのランケ批判」一橋論叢三二ノ四、一九五四、上原「マイネッケと現代歴史學」(世界史像の新形成昭和三〇所收)尙、歴史學一般については、ヘルン・ハイムの古典的入門書、坂口・小野譯「歴史とは何ぞや」(岩波文庫昭一〇)の外に、上原「歴史學の

概念(世界の歴史第六卷所收、昭和二九毎日新聞社)増田四郎「歴史學入門」(昭和三〇、河出文庫)参照。

それならば、その様な歴史學の陣營における問題要求は、どの様な形で經濟史研究にあらわれて來たのであるうか。それは個々の經濟制度や、個々の地方についての個別研究の徹底化と云う形で、古典的學說の批判と分解にむけられるばかりでなく、その様な個別的實證研究をふんまいて、その上に立って積極的に何等かの新しい體系をもった經濟史が意圖されたのであろうか。その様な歴史主義的問題要求にもとづく經濟史研究は、どの様な形で可能となつたのであろうか。

この問題を最もコンセクventな形でおいつめて行つたすぐれた學者の一人に、マックス・ウェーバーがあつた。彼に於ては、歴史的現實を個性的なものとして追體験的に理解しようとする歴史主義の陣營における認識要求が、社會科學の「方法」として論理的に自覺し直され(理想型の問題)、その自己抑止的な「方法」的自覺にもとづいてあの近代資本主義を中心課題とする研究が展開されることになる。ウェーバーの著名な論文「プロテス

タンティズムの倫理と資本主義の精神」はその様な「方法」のきびしい實踐を意味する。それは、西歐近代資本主義を、マルキシズムの場合の様に資本主義一般の問題として理解しようとしたのではなく、西歐近代社會にのみ固有な、他には全く類例のない、その歴史的特性を問題としてしているのである。いわゆる「禁欲的」合理主義を固有の歴史的特性としている西歐近代社會の特殊で個性的な歴史現象として、近代資本主義を捉えようとしているのである。彼にとつて問題なのは、普遍的概念としての資本主義一般ではなくて、自己がその中に生き逃れ得ぬ形で自己を規定し、それ以外では生き得ないところの西歐的現實——西歐近代資本主義——の個有的問題性にあったのである。その彼をとりまく西歐近代資本主義の個有的問題性を、彼は「合理主義」——それを生み出した人間自體の人格的自律性まで却って窒息させ器具化するまでに生活のあらゆる面を形式的に合理化してやまぬところの、それに拘らずウェーバー自身にとつてはそれ以外のところでは生き得ない不可避の「自由」の場であるところの——として自覺的にうけとつた。近代

資本主義がその様な個有的性格において彼にとつて問題となるのは、その様な云わば運命として與えられた不可避の歴史的現實の場の中で、どう生きるかと云う人間の存在の自覺的態度決定の問題が、ウェーバー自身の問題として、そこにかけられているからである。この様な主體的問題要求から、經濟社會の個性的な意味をとらえようとするためには、それを構成する個々の人間の經濟行為の個有的な意味、個有的な性格を類概念によつて捨象して了うのではなく、あくまでこれを生かしつゝその意味關聯の總體として社會諸形態を概念化する方法をとらなければならぬ。そのためには、先ず、それらの經濟行為を内面から動機付け規定している生活態度、生活心情の意味が、それと適合する個有的歴史文化との關連で追體験的に理解されなければならない。西歐近代資本主義を合理主義と云うその個性的形姿において自覺的に直觀するウェーバーは、その問題を解くために、そのあくなき合理化によつて人間自體をも疎外して行くこの近代資本主義の經濟組織は、そもそも人間のいかなる生活態度を構成要因として成立し、形成されて來たのが、と云う問



から發する問題要求が、彼の歴史主義的な個性化的把握の方法によって果して滿されるかどうかと云うことを検討する現實的基盤をもつことになる。彼は、この東洋研究によって、西洋と東洋をふくめた普遍史としての經濟史の體系の樹立を意圖しているのではないことは、從來のべて來た彼の方法的立場から容易に想定される。インドや中國の彼の研究においてとられる方法は、その自覺された形における論理的方法としては、彼の西歐近代社會の經濟史研究の場合と同じである。西歐近代の資本主義社會が個性的な文化形態として把握されたと同じく、ここではインドや中國のアジア的經濟形態も、それぞれを規定する宗教倫理の個有的性格との關聯で、それぞれに個性的な形姿において、すどく別出される。そこで個性的に把握したアジアの經濟社會を、彼は、ヘーゲルの様に人類の歴史的發展の一段階として、世界史發展の價值序列の中に體系的に位置づける様なことは、自覺的に抑止してこれを行わない。歴史生のそれぞれに個性的な多様性に即して、それらを理解しようとしているのである。しかしながら、注意しなければならぬことは、

そこで取上げられている東洋社會の個性的な側面は、彼が主體的に把握した西歐近代社會との比較においてであつて、しかもその比較の規準を西歐側におくことによつて類型化されたその意味での東洋社會の特質であることである。そもそも東洋社會がウェーバーにとつて問題となるのは、それがいかに西歐社會とは異つた構造をもつものであるかと云うこと、云いかえれば、彼がその歴史的個體性において把握した西歐近代資本主義がいかに西歐にのみ個有であり、それを生起せしめる諸要因がいかに西歐の獨自の歴史の中にのみ内在しているものであつて、他にはないものであるかと云うことを、東洋社會の分析を通じて益々確認し實證しようとするその關心のためである。ここでは、ウェーバーにとつてもと主體的な問題設定——彼をつつむ西歐的現實の個性化把握のためにその内面から必然的に設定されたカルビニズムの倫理と資本主義の精神との關連と云うこの特殊な主體的な問題設定——をば、「宗教と經濟及び社會層との關連」と云う宗教社會學的命題に一般化し、これを共通の比較の場とすることによつて、東洋的關連が、西

歐のそれといかに異った構造を示すかを、西歐的關連との比較によって類型的に把握しようとしたのであった。この兩者を比較する共通の場は、「宗教と經濟及び社會層との關連」と云う宗教社會學の主題なのではあるが、その比較の一方の極である西歐的關連はウェーバー自身によって主體的實踐的に把握されたものである。それは彼がその中に生きそれ以外では生き得ない西歐的現實の歴史個性と由來にかけていわば直觀的な自己意識として主體的に把握され、又その意味において問題提示の必然性をもっている。もっとも彼はこの様な直觀的の自己意識を論理的客觀性をもつ理想型的概念構成によって方法的に武装する。しかし、その様な論理的な概念構成の手づきの底には、主體的直觀的な自己意識が生きてこれをささえているのであって、そこで類型化された西歐的關連は、まさしく現實に彼自身の内面に生きて作用している歴史個體である。そしてこの主體的に把握された西歐的關連の歴史個性をますますその歴史個性において確認するために、東洋社會との比較がなされるわけであって、その意味で比較の一方の極である西歐的關連は同時に比

較の規準ともなっているのである。そしてこの規準との對比において、そこに視角を定着させることによって、東洋的關連の分析がおしすすめられて行くのである。したがって比較の他方の極である東洋的關連には、その把握において西歐的關連の把握における様なウェーバー自身の主體的實踐的問題設定の必然性が缺けていることは云うまでもない。もともと、價值視點を東洋社會の内面において東洋の現實をその内面から動かしているその歴史個性を、自ら存立にかけて確認しようとする主體的實踐的問題要求からウェーバーは出發しているのではな

い。彼の東洋社會分析の主題と視角とはすでに外から與えられているのである。その様な外から與えられている規準との對比において彼の東洋社會の分析は方向付けられていたのである。したがってその様な視角から把握された東洋社會の特異の構造は、主體的把握による歴史個體の類型化と云うよりも、特定の比較の基準を外におくことによって把握された全くの社會學的類型である。その様な類型がウェーバーにとって意味をもつのは、彼がその個性的把握にとめる西歐的關連との比較を通して

であつて、東洋の歴史の経過の中に自らを展開して行く歴史個體としてではない。従つてそこでは、西歐近代社會がたゞつて來た道とは別個な、歴史個體としての中國やインドの自己展開の道への展望は當然閉ざされてゐる。彼の把握した西歐近代社會生成の諸契機を「近代」の規準とするその限りにおいてのその意味での非「近代」的動きのとれない停滯的構造が、上述の様に限られた比較の場によつて類型的に、又その限りでまことにするどく剔出されることとなるのである。それ故、そこで云う停滯的と云ふことの内實の意味は、彼の把握した限りでの西歐近代資本主義の成立に因果歸屬の關係にある歴史的諸要因が、東洋には缺けてゐると云ふことだけの意味である。プロテスタンティズムの倫理が定向した様なその様な個性的な形における傳統破碎の契機が、儒教や印度教には缺けてゐる、と云ふことなのである。ウェーバーがあざやかに剔出した如く、儒教にはカルビニズムにおける様な神と世界との間のきびしいジュパンマングはなく、したがつて又禁欲的合理主義もベルーフの倫理もそこからは生れて來ない。しかし、それらのもの

が缺如してゐるからと云つて、中國の歴史は、或はアジアの歴史は、動かないと云ふことにはならない。それらのものは、西歐の近代社會のエートスをあたかも西歐近代にのみ固有なものとする要因なのであつて、それらのものが中國やインドの倫理に缺けてゐると云う指摘は、中國やインドが彼がきわめて個性的な側面において把握した近代西歐と全く同質なものとはなり得ないと云うだけの意味である。つきつめて云へば停滯的であると云うのは、それだけの意味である。中國やインドの歴史には、近代西歐がたどつた道とは異つた、異つた構造においては、固有の自己展開の道は、もちろん、内在してゐるはずである。固定化された儒教の教理の形式的な面においてではなく、その底にひそむ實踐的な中國のエートスが、この中國の歴史の固有な自己展開に、どの様な契機となつて作用してゐるのか、と云う問題も、又獨立に成立し得るのである。しかし、それはウェーバーの關心事ではなかつた。それは、中國の内面に身をおいて、みずからを展開發展せしめて行く主體的能動的諸要因をその歴史の中において主體的に把握しようとする實踐的

要求を、不可避の課題とする人々によって、はじめて主體的に設定され、検出さるべき問題であるからである。そして、その様な問題要求には、すでに、歴史を變革と發展の相において把えようとする別個の方法的視野が、個性化的把握の要求とならんで、同時に要請されているのである。

さて、この様にウェーバーの剔出した東洋社會の一面性は、彼自身の問題意識と問題設定にみずから意識して課した限定の當然の結果なのである。彼は、それ自體として、その傳統主義的構造を打破する何等の内面的契機をもたない、いわばどこにも出口のない全くの閉ざされた世界として、東洋社會の社會的精神的の内面における停滞的構造を剔出したのであるが、それは前述した様に彼の問題意識にとって意味あるその一面の類型化なのである。したがって、その様な西歐的價值意識とその視角から對照的に剔出され構成された東洋社會の一面を、あたかも、その方法的前提を無視して、私達がそれを東洋社會の不動のあり方として定式化してうけとること、きわめて危険であるばかりでなく、ウェーバーの自

己限定的な方法的自覺を理解しないものと云わなければならぬ。ウェーバーが東洋社會を研究主題としてとり上げるその動機にかけられている彼の價值意識、いいかえれば東洋社會がウェーバーに對してもつ意味と、東洋社會が、その中にすむ私達に對してもつ意味とは、必ずしも同一ではないのである。それは、西歐近代社會がウェーバーに對してもつ意味とそれが私達に對してもつ意味とは同一ではないのと同様である。そのことを正しく確認すること、そして、私達のおかれてゐる歴史的現實から私達は主體的に問題を設定して行かねばならないこと、そのことこそ、ウェーバーが私達に教えるところであつたのである。

それならばその様な經濟史研究の歴史主義的方法は、私達の現實に當面してゐる諸問題にとって、どの様な意味をもつのであろうか。

(註) マックス・ウェーバーの經濟史研究の理解のために  
は、M. Weber: Wirtschaftsgeschichte 1923. 黒江・青  
山譯「一般經濟史要論」上下二冊、(昭和二九—三〇年、岩  
波書店)の精讀が望ましい。ウェーバーの經濟史關係の著

## 一 橋論叢 第三十五卷 第四號

作の邦譯のきまを擧げれば、Gesammelte Aufsätze zur Religion soziale 3 Bde 1920~21 に收められ、Protestantische Ethik und der Geist der Kapitalismus 大家・梶山譯「プロテスタントの倫理と資本主義の精神」(岩波文庫)と同じくそこに收められ、Die Wirtschaftsethik der Weltreligionen の第一論文 Konfuzianismus und Taoismus、細谷徳三譯「儒教と道教」昭和十五年弘文堂、第二論文 Hinduismus und Buddhismus 杉浦宏譯「世界宗教の經濟論理」(マニヤ教と佛敎(一)) (昭和二八、マニヤ書房)。Gesammelte Aufsätze zur Wirtschaftsgeschichte 1924 に收められ、Die sozialen Gründe des Untergangs der antiken Kultur 堀米庸三譯「古代文化没落論」(世界大思想全集二一巻所収、昭和二九、河出書房)。又 Wirtschaft und Gesellschaft, 1921~22 の部分譯に濱島朗譯「權力と支配」(昭和二九年、マニヤ書房)がある。ウエーバーの方法論に關するものは Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, 1922 に收められ、その中の "Rohrer und Knies und die logische Problem der historischen Nationökonomie 松井秀親譯「ロマンチズム」(社會科學モナール叢書、昭和三〇年未來社)、Die "Objektivität" sozialwissenschaftlicher und sozialpolitische Erkenntnis 富永・立野譯「社會科學方法論」(岩波文庫)、Wissenschaft als Beruf 尾高譯「職業

としての學問」(岩波文庫)が邦譯されている。ウエーバーについては青山秀夫「マルクス・ウエーバー」(岩波新書)をはじめ多くの解説書や研究があるが、經濟史家としてのウエーバーを取上げた邦語文獻として、上原華祿「社會經濟史研究におけるマルクス・ウエーバー」一橋論叢二四、五、昭和二五年を特におく。尙、ウエーバーとマルクスとの方法的態度の根本的對立を明確に把握することによって、ウエーバーの問題と方法をその實存主義的傾向におくべきやかに浮彫にしたレーボットの研究「K. Löwith, Max Weber und Karl Marx, Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik 67, 1932. 柴田・安藤譯「ウエーバーとマルクス」(昭二四、弘文堂)及びウエーバーを直接の對象としたものではないが、マルキシズムの立場から、實存主義をすべく批判したルカーチの研究 G. Lukacs, Existentialismus ou Marxisme? 1948, 城塚・生松譯「實存主義かマルクス主義か」(昭二八、岩波書店)の二者は、ウエーバーとマルクスとの方法的對立をさらえる問題状況を理解する上に重要な文獻である。

## 三

ところで問題を三轉して、脚下の、私達のおかれてゐるこの日本の歴史的現實に眼をうつして考えて見ると、

そこには又、以上私達が問題として來たのとは異つた新たな問題狀況に當面して來るのである。それは、ここ百年來、日本のみならず東洋の國々は、西歐文化の大きな影響の下にその歴史の發展と改革を實踐的課題としていると云う現實である、東洋の諸民族の新しい歴史的發展に、この西歐文化の流入が一つの契機をなしそれを促進する一つの要因となつてゐることは否定出來ない。もちろん、このことは、東洋の諸民族の全面的歐化を意味するものではない。西歐文化の大きな影響の下に立ちながらも、その様な外來文化をうけ入れるその個性的な受け入れ方、その様な外來文化をうけ入れる主體的個性的な力の中に、問題の重要な核心がひそんでゐるのであって、その歴史個體としての主體の連續を自覺しないと、日本の歴史的現實、東洋の現實をその内面から動かしてゐる本源的な力を見失うことになる。その意味で、歴史をその個性においてとらえると云う問題要求は、私達の現實理解のためには、重要な意味をもつのである。

しかしながら、西歐の生んだ文化が、その思想が、その政治制度が、そしてその經濟組織が、私達の生活の中

に侵透して、そこに大きな力をもつて私達の歴史的現實を規定してゐることは否定すべくもない。その受け入れ方は個性的であり、西歐に特殊で個有な（例えばウェルバーの自覺した様な形における）その意味で「本質的」な側面においてではなく、むしろその特殊に媒介された西歐文化のもつ普遍的な側面が、日本の個有な歴史的條件の下にうつし植えられて、私達の個有の生活感情と混り合いつゝ一種獨特の生活文化を形成して行くことになるのではあるが、それにしても、その様な西歐文化の影響を無視して私達の歴史的現實をかたることは出來ないし、又それを無視して、われわれの歴史の個有の性格を排他的に主張することは出來ない。いや、私達の主張する歴史的個體性それ自體が、この様な外來文化との接觸の現實歴史の場において生育されて來た一面もたしかにあるのである。この様に西歐文化が日本および東洋の諸民族の生活にうけ入れられて、大きな力をもつてそれを作用してゐると云う歴史的現實は、とりもなおさず世界の諸民族がそれぞれ特殊個有の性格を媒介としながらも、その底に相影響し合うことの可能な共通な場、

そこに普遍的な問題設定を許す共通の問題の場が、普遍的な人間性にかけて、ひそんでいることを物語っているのであって、單に、東洋社會と西歐社會を、それぞれの歴史個性にかけて、それぞれの特殊固有な性格において對立的に把握すると云う歴史理解の仕方だけでは理解出来ない問題を残していることを私達に暗示している。西歐の文化と歴史は、少くとも私達にとっては、それが私達に作用する普遍的な側面においても重要な意味をもつのである。西歐近代の生んだ經濟制度や經濟組織が、それのもつ特殊個有の面においてよりもむしろそれのもつ普遍的の面において私達の生活の地盤の上にうつし植えられ、それが現實に作用する私達の歴史的现实にとつては、西歐近代資本主義の發展の過程を、その特殊固有な性格において理解するよりも、その様な個性的側面を捨象して、そこから經濟生活一般の普遍的運動法則を見出す理論的歴史解釋の方法が、一方においては私達にとって一つの現實的意味をもつのである。ヨーロッパの經濟發展の過程をたどることが、私達の歴史的現實の理解に役立つと云う意味は、あたかもその様な普遍的な歴史發展の

運動法則の面においてもあつたのである。そして西歐近代資本主義の發展の過程を、その特殊固有な性格においてではなく、經濟生活の發展のそれ自體に内存する普遍的な運動法則の面においてとらえたものに、マルキシズムの經濟史理論があつたことは前述の通りである。それは人間の經濟行爲における自然的衝動と云う最も本源的な而も普遍的な關係にまで具體問題を引きおろして抽象化し、そこに内在する生産力と生産關係の矛盾から歴史發展の運動法則を基礎付ける高度に理論化された體系であり、そしてそれは、歴史的现实に内在する矛盾を歴史の變革と發展によつて止揚しようとするきわめて實踐的な問題要求から設定された歴史把握の態度であつた。そして、あたかも、私達のおかれてゐる歴史的现实は、そこに尙殘る舊秩序の變革と、歴史の新たな發展を、その切實な實踐的課題として課せられていたのである。その様な普遍的な歴史發展の運動法則が私達の歴史的现实の理解にとって意味をもつのは、それが、私達の經濟生活のもつ普遍的な側面にぶつかるその限りにおいてではあるが、それが私達の個有の歴史の場において、どの様

な特殊個有の形姿をとって表われるかと云う問題方向において問題が追求され、具體特殊の多様な歴史事象によって、抽象的運動法則の諸概念が再検討され、それぞれが具體個有の歴史素材によって内容付けられることが可能となつて來れば、それは單に抽象的法則としてではなく、具體的歴史形成の主體的決定的要因を、主體的能動的に把握しようとする歴史主義的問題要求をもつ者にとつても、有力な認識手段としての武器を提供することになり得るのである。

しかしながら、史的唯物論の個々の段階概念及段階序列を定式化し、その定式を不動のおきてとして、個別的歴史事實への肉薄を怠る限り、その様な新たな問題視野は開けない。その限りでは、經濟生活の發展の中に普遍的な法則を見出し、その法則により歴史一般を解釋しようとするマルキシズムの經濟史理論と、歴史的生のそれぞれに個性的な多様性を強調し、ひたすら個別的實證研究の徹底化によって、益々個別化して行く歴史學の研究傾向とは、相觸れる契機をもたないで、その對立をつづけることになる。經濟史は經濟學なのか、歴史學なのかと

云う疑問が提出されて來る所以である。

ところが、この二つの相異なる歴史研究の方法が觸れ合う契機が、個別的實證研究を媒介として、マルキシズムの陣營から提示され始めたこと、しかも、その様な兩者の接觸を可能にする様な新たな歴史的現實の局面が、アジアの世界は展開され始めたことに、私達は注意しなければならぬ。それは、廣範なアジア諸民族をその中に含むソヴィエト・ロシアと、中國におけるマルキシズム歴史學の新たな發展の中に示され始めたのである。そこでは、マルキシズム歴史學は種々の新たな問題に當面しなければならなかつた。そこでは先ず「階級」の問題と不可分の關係において、「民族」の問題が、すどく自覺されて來るにしたがい、従來西歐學者より與えられていた停滯性の概念をうちやぶって、民族の歴史的現實をその内面から動かして行く民族の自律的發展の力が、唯物辯證法の基本的立場から民族の歴史の中に求められねばならなくなつて來る。したがって生産力の概念も單なる客體としての抽象的概念としてではなく、民族の歴史の形成と發展の主體的、決定的要因として、それぞれの民族

の歴史の中において主體的・能動的に把握されて來る。又、歴史素材の面においては、ヨーロッパ史とは異った構造をもつさまざまな歴史事象が、そこでは從來高い水準をもつ個別的實證研究の傳統的遺産とその新なる進展によって提示されていたのであるが、その様な個別的史實の多様性をふんまえて、その上で尙マルキシズムの基本的立場から、それぞれの民族の歴史の發展過程を理論的に把握して行かなくてはならない困難な問題に直面することになる。その困難な問題を克服して行くためには、單にマルクスの古典的著作に散見する見解を定式化し、その定式を金科玉條として、それによって個別的史實の實證性を無視したり、それを公式的に史實にあてはめると云う安易な歴史解釋の仕方は、きびしく批判をうけて來ることになる。問題をマルクスのそもそもの問題提示の意味にまで還元し、その基本的實踐的立場の正しい理解から史實に即して理論的諸概念を構成することが要求されて來る。主としてヨーロッパ史の史實から構成された古典的概念は、それぞれの民族の具體特殊な歴史的条件の下に、新たな個別的史實に即して検討されて來、

奴隸制・封建制と云う基本的な概念構成においても、それらの民族のとする特有の形式が問題となつて來る。しかし、それらの新なる努力は、あくまでマルキシズムの基本的立場から、個別的史實に肉薄し、個別的史實に即しながら、その理論的理解を深化し、その歴史的法則的把握を實證化しようとする試みなのである。それはきわめて困難な問題を尙多く残しているのではあるが、この様なマルキシズム歴史學の新たな努力と苦惱とは、ソヴィエト・ロシアと中國において最近活潑に行われている時代區分の繼續的論争の中に端的に示されている。それは、ソ同盟史、或中國史の發展過程の中に、奴隸制、封建制、資本制の諸時代の分期をどこに區切るかと云う問題を中心とする論争なのであるが、それぞれの論争を通じて、奴隸制・封建制と云う概念の内容が、それぞれの民族史の示す多様な歴史素材に即して再検討され、それらの民族の特殊個有的な歴史的諸条件を問題としながら、しかもその上で尙唯物辯證法的方法的立場から統一的體系的に歴史發展の法則性を確認しようとしている點で、注目しなければならぬ。

そして戦後における日本経済史の研究も、この時代區分の問題を中心に多くの進展をなして來て來ているのである。それらの論争は未だ十分の結實を見ないで、問題はむしろ將來に多くのこざれている。それらの論争においては、それぞれの民族の特殊な歴史の諸條は、基本的歴史發展を制約する阻止的要因として、未だ外在的に把握されるにとどまっていたものではあるが、論争が今後更に展開されて行けば、マルキシズムの基本的立場の枠内においてではあるが、史實に即して方法的諸概念を検討し、そこから新たな史實解釋と概念構成の假設を提示しながら、再びそれを新たな史實群の實證によって檢證すると云う操作を根強く繰返すことよって問題を内在的に把握して行けば、個別的實證研究と體系的歴史把握の要求とをむすびつけて行く一つの可能な道を暗示するものとして、注目しなければならぬ。

(註) ソヴィエト・ロシアにおける時代區分の論争は、歴史雑誌「歴史の諸問題」Вопросы истории (一九四九、一一) に發表されたカ・ヴェ・パシレヴィチの論文「ソ同盟史における封建時代の時代區分の試みについて」と、エマ・ド

經 濟 史

ルウジニンの論文「ロシアにおける資本主義的諸關係の歴史の時代區分の試み」を契機として、活潑に展開され、最近にまで及んでゐる。この論争の中、一九四九より一九五二年までの間に雑誌「歴史の諸問題」に掲載された二十二人の學者の論文は、獨譯されて、「Zur periodisierung des Feudalismus und Kapitalismus der Geschichtlichen Entwicklung des UdSSR, Diskussionsbeiträge, 20. Beifelt zu Sowjetwissenschaft, Berlin 1952.」の中にまとめておさめられていて便利である。尙、中國の時代區分の論争については、古代史の分期問題に關しては、郭沫若、翦伯贊、侯外廬等の相異なる見解を中心として、雑誌「歴史研究」(一九五四—五五)において多くの新進の學者が論争を展開し、近代史分期の問題について中國史における資本主義の萌芽をめぐってこれ亦、雑誌「歴史研究」(新建設)を主たる舞臺として多くの新進學者によって論争されている。

私達は、經濟史は經濟學であるか歴史學であるかと云う提問を手がかりとして、經濟史と云う學問の性格とその當面している問題について考へて來た。それは、經濟生活の歴史を普遍的な發展法則によつて理論的に把えようとするか、或は經濟生活の歴史をそれに擔う主體の個有な歴史的特性において主體的に把えようとするか、と

云う問題に換言出来る提問であつた。それは窮極においては、私達のおかれてゐる歴史の現實ひいてはそれをささえる歴史文化の全問題に對する私達の態度決定にかかつてゐる問題なのであるが、いずれの方法的立場をとるにせよ、多くの困難な問題が私達の前によこたわつてゐることは、上來みて來た通りである。その様な困難な問題を回避することなくそれととりくんで行くためには、云うまでもないことではあるが、いずれの方法的立場をとるにせよ、つねに私達自身の個別的實證研究に即して問題を考え、個別的實證研究を通じて考察を深めると云うことが一番大切であると云うことを忘れてはならない。方法の問題を、對象の實證的研究の外側で抽象的に考へることは、私達を獨斷へと導き、そこでは何等の問題の解決は得られないからである。もしも、その様な個別的實證研究に即して、私達のとるべき方法的立場の省學をふかめて行くならば、いずれの立場をとるにせよ、兩者は相互に全く他を排除すべきものでなく、兩者の接觸の契機を私達の内面にきざぎざ上げる要求を痛感して來るにちがいない。それはきざめて困難な問題ではある

が、その要求をもたざる得ない様な歴史の現實の中に私達はおかれてゐるのである。問題は常に私達のおかれてゐる日本の歴史の現實から出發する。私達はそれぞれの關心のおもむくにしたがつて、或は日本經濟史、或は西洋經濟史、或は東洋經濟史と、その専門領域がわかれて行つても、私達は、それぞれの専門領域における傳統的なテーマについての多くの個別的専門研究を十分消化しながら、その上で尙それにとらわれずに、常に新たに、私達のおかれてゐる共通の歴史の現實の基盤から、主體に問題を設定し、主體的に問題を把握することは忘れてはならない。その様な意味で私達の要求する經濟史は、未だいずれの専門領域においても十分な形では與へられてはいない。それは經濟史研究を志す者の共通の今後の課題なのである。

\* \* \*

本稿では、専ら經濟史研究の當面してゐる方法上の問題についてのべたので、日本經濟史、西洋經濟史、東洋經濟史の個々の専門領域における具體的主題に關する研究文獻については關説しなかつた。その様な文獻案内については、一橋新聞部編「經濟學研究の栞」第三編「西洋經濟史」

第四編「東洋經濟史」(昭和二十四年、春秋社)、及びその後  
の新しい研究文獻と各専門領域における問題狀況について  
は、社會經濟史學會編「戰後における社會經濟史學の發

達」(昭和三〇年、有斐閣)を参照されたい。(一九五六、  
二、一八)

(一橋大學助教授)